



▲2011年の展示用に手作りしたアポロ宇宙飛行士（オールドリン）の顔出しパネル

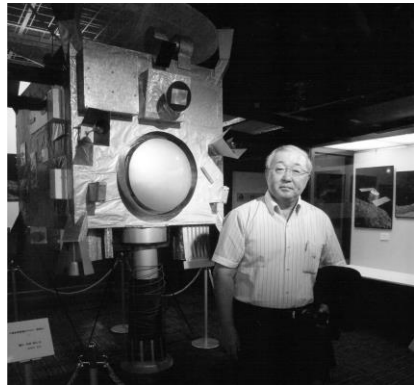
うちの「宇宙の学校」

グレーの地域が「宇宙の学校」開催地域（都道府県）です。
今回は長野県伊那市の宇宙の学校を紹介します！！



伊那市「宇宙の学校」 伊那市創造館館長 捧 剛太

長野県の伊那市創造館は、昭和5(1930)年に建てられた旧「上伊那図書館」をリニューアルし、2010年に市の生涯学習の拠点施設としてオープンした博物館類似施設です。「縄文から宇宙まで」をキャッチフレーズに、考古・歴史・自然科学・芸術・環境・宇宙等に関する、さまざまな企画展・体験教室などを行っています。ことに宇宙に関しては、「小惑星探査機はやぶさ君の冒険(2010)」・「アポロは本当に月へ行ったのか？(2011)」・「糸川英夫生誕100年記念展(2012)」・「日本人工衛星博覧会(2014)」と、独自の企画展を行ってきました。



▲はやぶさ実物大模型の前に立つ的川先生（2010年10月）

伊那市創造館▶
※昭和のモダン建築です



▲創造館の中庭から飛び立つ熱気球



▲宇宙の学校 in 伊那「ミニプラネタリウムを作ろう」

伊那市創造館における「宇宙の学校」は、初年度2年目こそKU-MAから派遣された講師の先生とKU-MAの教材におんぶに抱っこ状態でしたが、3年目(2013)から、年5回のスクーリング中、2回は伊那市のスタッフのみで行う様になりました。学校の先生をはじめとする市民ボランティアに大変助けられています。

中でも伊那市内のボランティア天体観察団体「すばる星の会」の野口先生が開発された教材「ミニプラネタリウムを作ろう」は、市販のビニール傘を天球に見立てて、星図を見ながら星座を描き込んで行くものですが、いつも大盛況で、親子でじっくり集中しながら過ごす時間となっています。

今年もまた新たな参加者を募集する季節がやってきました。楽しくて、勉強になって、親子の良い思い出になる「宇宙の学校」を一層盛り上げていきたいと考えています。

KU-MA と わたしたち

★☆☆みなさまからお寄せいただいたメッセージを紹介いたします★☆☆

私が「宇宙の学校」と出会ったのは、2009年の6月でした。相模原市で「宇宙の学校」を立ち上げようとする機運が高まり開校に向けたセミナーに参加したのが始まりです。「宇宙の学校」に関わり実感したことは、「教材」と「親子とその仲間との協同的な学びの仕組み」の素晴らしさでした。
私は、37年前、中学校の理科教師として相模原市の学校に勤め始め、今年の3月に定年を迎えました。子どもへの最後の授業を考えたとき、真っ先に思い浮かんだのは「宇宙の学校」の教材を使った授業でした。
そして、中学3年生への卒業記念授業として、「江戸時代の紋切り遊びと合わせ鏡の性質から友だちのよい点を見つける授業」を実施しました。折り紙からできる色々な模様。合わせ鏡の角度と像の数。合わせ鏡を使った紋切り遊びをする方法を見つける等など、子どもらは、夢中になって取り組んでいました。
これからも私は、人と人を繋ぐことができる「宇宙の学校」の素晴らしさをより多くの親子に味わってもらえるように自分も楽しみながら活動していきたいと思っています。

会員 稲葉 茂（神奈川県相模原市）



▲稲葉先生 定年前最後の授業風景

4年前、大震災の後ようやく携帯が繋がった頃、KU-MA事務局から安否確認の連絡がありました。電話口の向こうから聞こえたKU-MAスタッフの安堵の声は、沈んだ気持ちでいた私に勇気を与えてくれるものでした。「出来ることがあれば…」との言葉に甘え、当時勤務していた保育所で親子遠足が中止となったこともあり、親子で楽しめる「ミニ宇宙の学校」を開催していただくことになりました。ロケットの打ち上げの映像に、水ロケットの打ち上げに、大きな熱気球に、みんなの表情が明るい笑顔でいっぱいになり、おかげさまで楽しいひと時を過ごすことができました。

再度の開催を希望するご父兄からの声もあり、2回目は場所を生涯学習センターに移し、地域や年齢を超えてより多くの親子が参加できるようにしていただきました。その後はKU-MA事務局の方々に甘えながらの「宇宙の学校 at しおがま」が毎年開催されています。定年後の私は主体的とは云い難いボランティア参加で課題は山積ではありますが、今年は仲間が増える予定です。4年前に味わった素敵な時間と空間をこれからも多くの仲間や親子と共有して行けることを楽しみにしています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

会員 阿部 いと子（宮城県塩竈市）



▲阿部さん（写真前列左）と塩竈のみなさん

＝「宇宙の学校」のあれこれ＝

- 「宇宙の学校」は年に数回ある集まりをイベントではなく「スクーリング」とよんでいる。
- 「スクーリング」には親子で参加し、一緒に宇宙のお話を聞いたり、一緒にものづくりなどをする。授業参観のような形を取らない。
- お話しやものづくりの内容は子どもの興味を喚起はするが親の解説や手助けなしには完結できない。
- 家庭のつづきを「スクーリング」で行い、「スクーリング」のつづきが家庭での学びに継続される。「宇宙の学校」の先生はお父さん、お母さんです。
- 配布されるテキストは子どもへの宿題ではなく、家庭での学びをつくる事例集です。お父さんやお母さんの指導書です。
- 宇宙の学校の会場には前向きに並べられた机・椅子はなく、床に敷いたシートの上で作業します。
- 「スクーリング」に来たら、みんなと協力して準備をしたり、後片付けなどできることを自分で考え、分担します。

また、夕暮れ時の美しい空や満天の星、野山や小川で出会う小動物や花、果実豊かな自然も日常のものではなくなっていました。トンボを捕まえ損ねたり、渋柿にかじりついてしまったり、成功も失敗もある自然体験は客体であった頃の幼児万能感を打ち砕き、失敗を糧として知恵を付け、技術を磨き、子どもを賢くたくましくしました。その先の地平を広げる冒険心も培ってくれました。
うまくいかないのは誰のせいでもない。自分を磨くしかないのです。自分を見つめさせ、次への挑戦を促す偉大な先生である自然の影も遠くなっていました。
人生を自ら切り拓いていく上で欠くことのできない自立の基礎を培う上からも、失いつつある大切な子どもたちの環境を復権させる試みの一つが「宇宙の学校」なのです。
「そういえば」と宇宙の学校についてのあれこれに思い当たることがあれば、あなたは既にKU-MAの仲間ですね。
では、いくつかを列挙してみましよう。

この頃の子どもは、親といっしょに自然の事象に触れ合ったり、お手伝いをしたり、親の働く姿や親が周囲の人々と接する様子などから多くのことを学び取っていました。抱きしめる愛を基盤としつつも、日常生活や自然と触れ合うなかで親子が学びを創り出し共に学び合うことによって家族の絆は確かなものになっていきます。
お手伝いがうれしいのは、家族の一員として役立つ自己の発見があるからです。サービスを受けるお客様（客体）としての存在から家庭を支える主体としての自分という自覚が芽生え、キャリアにつながる小さな火が心にとる瞬間でもあります。しかし、多くの家庭で、祖父母の時代にはあった子どもの仕事ぐが便利になった生活環境と引き替えに減少してしまいました。

新年度を迎え、各地の「宇宙の学校」からスクーリングの日程や内容などの情報が届いています。今年度も趣旨に賛同され、「宇宙の学校」の仲間に加わっていただく学校が数校あり合わせて55校を超える見込みです。そこで今回は、「宇宙の学校」についての理解を更に深めていただくための「あれこれ」についてお話ししたいと思います。
子どもたちの生活の場は家庭、地域、学校などです。なかでも、家庭は子どもの大切な居場所であり、心の拠り所です。親やこれに準ずる人との愛情による絆を深めながら成長していく場です。
さて、乳幼児期を過ぎる頃から、自然とのふれ合いやお手伝いなどの生活体験が重要になります。幼稚園の年長さんから小学校の中学年くらいの子どもの児童がこの時期に当たります。まさに「宇宙の学校」が対象にしている子どもたちです。

「宇宙の学校」についてのあれこれ
理事 遠藤純夫